

trivia ■ 皮膚科のトリビア ■ (131)

本欄は、浅井皮膚科クリニックのホームページに連載されている「皮膚科のトリビア」を紹介させていただくものです。学会・研究会などで聞きししたことをその都度まとめ、連載されています。ご意見等ございましたら、ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

好酸球数が10,000以上になる疾患

第44回神奈川皮膚科免疫アレルギー懇話会から(平成27年10月22日)

臨床検査を行った80万の検体から、好酸球数に注目して原疾患が何かを調査した。好酸球数2,000/ μ l以上(全検体の0.13%)では、薬剤性肝障害、固形腫瘍、皮膚疾患(好酸球性血管浮腫とアトピー性皮膚炎を除く)、血液腫瘍、気管支喘息、好酸球性血管浮腫、Churg-Strauss症候群(好酸球性肉芽腫性多発血管炎：EGPA)、好酸球性肺炎、アトピー性皮膚炎の順に頻度が高く、薬剤性肝障害、固形腫瘍、皮膚疾患の3つで50%以上を占める。好酸球数10,000以上(全検体の0.01%)では、non-episodic angioedema with eosinophilia (NEAE)、EGPA、好酸球関連腸疾患の順で多かった。好酸球数2,000以上が持続する場合には、とくに心筋障害、弁膜症などの心疾患に注意が必要である。「重症の気管支喘息に使用可能な抗IL-5抗体であるmepolizumabは末梢血中の好酸球数を劇的に減らすらしい。アトピー性皮膚炎の紅皮症でも2,000を越えるくらいで10,000にはならないようだ」。

表皮が作る内因性ステロイド

第44回神奈川皮膚科免疫アレルギー懇話会から(平成27年10月22日)

表皮ケラチノサイトは11 β hydroxysteroid

dehydrogenase 1 (11 β HSD1) という酵素により、中枢とは異なる機序で内因性グルココルチコイドを産生している。消化管や気道上皮細胞でも同様に内因性のステロイドホルモンが産生され、炎症局所での行き過ぎた組織障害を抑制している。11 β HSD1 阻害物質やノックアウトマウスを用いた検討では、ある条件下で内因性グルココルチゾールは、中枢性とは反対にIL1, IL6, TNF α などのサイトカインを正の方向に制御し、バリア保持など皮膚の恒常性の維持に重要な役割をはたしている可能性がある。アトピー性皮膚炎では11 β HSD1の産生が低下していて、ストレス下ではさらに減少する。コレステロールには11 β HSD1の活性を増加させる働きがある。

「ステロイドにもかかわらずサイトカインに対する正の制御があるというところが面白い。表皮でちょくちょく起きている炎症は、表皮が最前線で制御しているということか」。

Möller-Hunter舌炎

第12回相模原皮膚科学セミナーから(平成27年11月7日)

舌の所見から全身疾患を疑う代表的疾患。舌全体が赤く腫れ、しかし一部に貧血性の変化を伴い、舌背にV字型あるいはM字型の潮紅を認め、舌苔は萎縮し光沢がある。痛みを伴うことがある。Moller-Hunter舌炎といい、ビタミンB₁₂の欠損すなわち悪性貧

トリビア (trivia) = 3を意味するtriと十道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにでもある場所」。そこから転じて「瑣末なこと」となり、今では雑学的知識、豆知識、などを意味する言葉として定着している。

浅井俊弥
Asai, Toshiya

浅井皮膚科クリニック

(〒240-0013 横浜市保土ヶ谷区帷子町1-14)

ホームページアドレス：

<http://www.asai-hifuka.com>

血に伴う症状。

「忘れかけていた病名であった。舌痛があるとなつていよいよ亜鉛欠乏を考え、プロマックの投与になってしまいが、きちんと採血をして、必要があればメチコバルの投与も考えよう。なお、ビタミンB群の欠乏症では、ペラグラを含め、舌炎、口角炎、口唇炎をきたすことが多いことを再確認した。B2欠乏症では舌が赤紫色になるらしく、*magenta tongue*と呼ばれるそうだ」。

ないが、モーラスとの関連を念頭に置いておこう」。

カシューナッツの木はウルシ科の植物だった

横浜市皮膚科医会学術講演会から(平成27年11月11日)

“ウルシでかぶれる人は、マンゴとギンナンに注意すること”は皮膚科医の常識である。マンゴのかぶれはウルシオールに似たマンゴールが原因である。ギンナンの外種皮に触れて起こるかぶれはギンコール酸が原因である。カシューナッツもマンゴと同様ウルシ科の植物で、種子はカシューアップルと呼ばれている。殻から取るカシューナッツオイルはウルシと同様に塗料として用いられていて、接触皮膚炎の原因となる。「カシューが塗料になっているとは知らなかった。またアレルギーもナッツによる即時型だけかと思っていた。ナッツにはウルシオールに似た成分は含まれていないらしいが、接触皮膚炎の既往も聞いてみることにしよう」。

モーラスの光かぶれに勧めてはいけな日焼け止め

横浜市皮膚科医会学術講演会から(平成27年11月11日)

ベンゾフェノン誘導体(オキシベンゾン、ジオキシベンゾン)は紫外線吸収剤として多くの日焼け止めに配合されているが、同じベンゾフェノン基を持つ医薬品にケトプロフェンがある。さらに、脂質異常症治療薬であるフェノフィブラート(リピディル・トライコア)も同じ構造を持ち、交叉反応が確認されている。

「稀ではなく経験するモーラストープによる光かぶれの患者には、再発防止のために少なくとも1カ月は日焼け止めに塗るよう指導してきたが、オキシベンゾンが配合されている製品は使ってはいけないということだった。これまで説明してこなかったことで、ちょっと心配になった。フェノフィブラートによる日光疹型薬疹は経験してい

